

西大室遺跡群

土地改良事業実施地区内埋蔵文化財発掘調査概報

昭和57年度

前橋市教育委員会

序

近年、農業の近代化がすすむにつれて、農地の効率的利用を図るために、大規模な土地改良事業が盛んに行われています。このような開発事業と埋蔵文化財保存の問題は常にうらはらの関係にあり、前橋市教育委員会にあっても、文化財保護という立場から両者の調整に努力しているところであります。

ここに報告する西大室遺跡群もその一つで、道水路部分及びやむを得ず削平する部分について、記録保存のための発掘調査を実施いたしました。なお、昭和 54 年度から続いたこの発掘調査も、土地改良事業の完結に伴い、今年度をもって終了いたします。

調査の結果、弥生時代から平安時代の各時期にわたる竪穴住居跡等、この地域の歴史を解明していくにあたって貴重な資料が数多く得られました。ここにその成果の一端を報告いたします。

この調査を実施するにあたり、終始ご協力いただいた農政部土地改良課、西大室土地改良区の方々、また、直接、調査に携わっていただいた大勢の作業員の方々に対して、厚くお礼申し上げます。

昭和 58 年 3 月 31 日

前橋教育委員会

教育長 金井 博之

例　　言

1. 本書は、西大室土地改良事業実施地区内（久保皆戸遺跡）の埋蔵文化財発掘調査についての概報である。

1. 調査主体は、前橋市教育委員会である。

3. 発掘調査の要項は、次の通りである。

　調査場所　前橋市西大室町上郷引2261番地　他15筆

　調査期間　昭和57年8月11日～昭和57年11月6日

　発掘担当者　前原照子　林喜久夫　松村親樹　江部和彦

　事務局　　福田紀雄　木部日出雄　布施和男

4. 本書の執筆は、江部が担当し、遺物整理、図面整理、図面作製、遺物写真等は、担当者及び整理作業員が分担して行った。

5. 発掘調査にあたっては、地元を中心とした大勢の発掘作業員の方々の協力があった。

6. 本調査における出土遺物、実測図、写真等は一括して前橋市教育委員会で保管している。

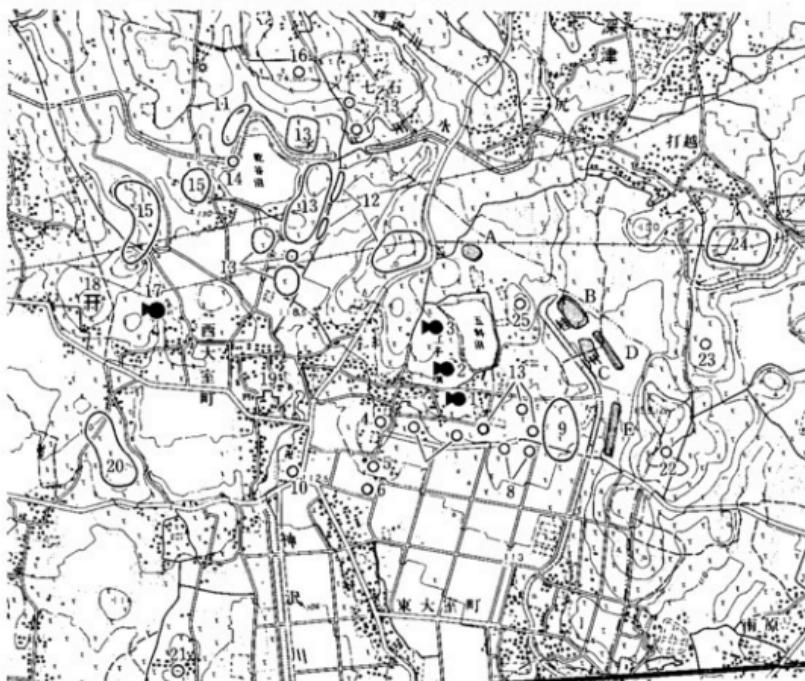
目　　次

序	
例　　言	
I. 概　　説	1
II. 発掘調査の概要	3
1. 発掘調査の方法と経過	3
2. 遺構と遺物	3
(1). 遺構	3
(2). 遺物	3
(3). 住居跡	4
① 弥生式土器を伴う住居跡	4
② 古墳時代の住居跡	9
③ 奈良、平安時代の住居跡	13
④ 住居跡一覧表	26
(4). その他の遺構、遺物	28
① 土壙	28
② ピット	28
③ 溝状遺構	28
④ 井戸跡	29
⑤ その他の出土遺物	29
III. まとめ	32

I 概 説

赤城山南麓は、多くの河川が南流し、開析谷を作り、数多くの舌状台地が形成されている。台地は洪積層で形成され、関東ローム層が厚く堆積している。しかし、河川による台地の開析、氾濫の影響を受け、関東ローム層が見られず、部分的に沖積層が形成され、粘土層や砂礫層が堆積しているところも見られ、地域により複雑な様相を呈している。

今回、西大室遺跡群第5次調査地区は、西大室町字上繩引、下繩引、久保皆戸、三騎堂にわたる地域で、南流する河川のひとつ、桂川左岸の舌状台地の縁辺部、及び右岸の舌状台地に位置しており、東は、多田山丘陵が隣接する標高125m前後の平坦な地域である。



挿図1 周辺の遺跡分布図 (1 : 25,000)

(挿図1の説明)

1. 前二子古墳、2. 中二子古墳、3. 後二子古墳、4. 荒砥147号墳、5. 大室小校庭遺跡
6. 大室小農場遺跡、7. 荒砥上諏訪遺跡、8. 荒砥五反田遺跡、9. 上川久保遺跡
10. 大室石原遺跡、11. 昭和54年度調査地、12. 昭和55年度調査地、13. 昭和56年度調査地
14. 製鉄遺跡、15. 大稻荷古墳群、16. 巨石祭祀遺跡、17. 伊勢山古墳、18. 産泰神社
19. 大室城跡、20. 阿久山古墳群、21. 天神古墳、22. 多田山火葬墓群、23. 赤堀茶臼山古墳
24. 藤山古墳群、25. 五料山古墳、A~E. 昭和57年度調査地

本遺跡地周辺には、国指定の前・中・後二子の3基の前方後円墳、赤堀茶臼山古墳等、数多くの古墳が密集しており、先土器時代から平安時代にかけての各期の遺跡の包蔵地としても知られている。今までに行われた発掘調査によれば、大室小学校々庭遺跡、大室小学校農場遺跡、大室石原遺跡では、古墳時代の前期及び後期の住居や遺物が検出されたのをはじめ、荒砥上諏訪遺跡（昭和52年度調査）では、古墳時代の住居、荒砥五反田遺跡では、古墳時代及び平安時代の住居や掘立柱建物遺構が調査され、上川久保遺跡では、縄文時代及び平安時代の住居が検出されている。

〔注1〕

〔注2〕

西大室遺跡群としては、第1次調査では、乾谷沼西側の5基の古墳が調査され、第2、3次調査では、縄文時代及び古墳、奈良平安時代の住居、弥生時代の周溝墓、6～7世紀の古墳と埴輪棺、奈良、平安時代の掘立柱建物遺構、中、近世墓塚が検出され、第4次調査では弥生、古墳、奈良、平安時代の住居、周溝墓、6～7世紀の古墳、中世墓塚、大室元城跡等が調査されている。

〔注3〕

注1、「富田遺跡群、西大室遺跡群、清里南部遺跡群」（1980 前橋市教育委員会）

注2、「西大室遺跡群II」（昭和55年度 前橋市教育委員会）

注3、「富田遺跡群・西大室遺跡群」（昭和56年度 前橋市教育委員会）



図2 調査区位置図

II 発掘調査の概要

1. 発掘調査の方法と経過

本発掘調査は、西大室土地改良事業に伴う埋蔵文化財の事前調査であり、昭和57年度土地改良事業施工部分について実施した。今次調査は、昭和54年度から続く第5次調査であり、本年度は最終年次にあたる。

調査箇所約1haは、桂川を挟む5地区に分かれ、便宜的に、北からA・B・C・D・E区とした。いずれの区も、道水路部分及び削平される部分であるため、耕作土等を重機で遺構確認面まで除き、全面発掘を行った。施工工事手順の関係で、C・E区から調査を開始し、B、D、A区へと移っていった。

A区は、調査区全体の最北で、桂川右岸の舌状台地に位置し、昭和55年度調査地区に隣接しており、ここでは、弥生式土器を伴う住居跡4軒、ピット6、溝4条が検出された。B・C・D・E区は、桂川左岸の舌状台地縁辺部にあたり、昭和56年度調査地区(梅ノ木地区)の対岸であり、東には多田山丘陵が接している。B区では、弥生式土器を伴う住居跡2軒、奈良、平安時代の住居跡19軒、ピット8、溝5条が検出された。またB区南端からは、縄文土器片が多量に検出されたが、縄文時代の遺構は確認できなかった。C区では、弥生式土器を伴う住居跡1軒、古墳時代前期の住居跡2軒、平安時代の住居跡3軒、土壤1、ピット3、溝9条が検出された。D・E区はともに道水路部分であり、D区では、ピット34、井戸跡2、溝1条が検出され、E区では、ピット18、溝1条が検出された。また、D区では、住居や溝及びピットを埋めている土から瓦塔が検出され、D、E区では、表探し及びピットを埋めている土から縄文土器片が検出された。

2. 遺構及び遺物

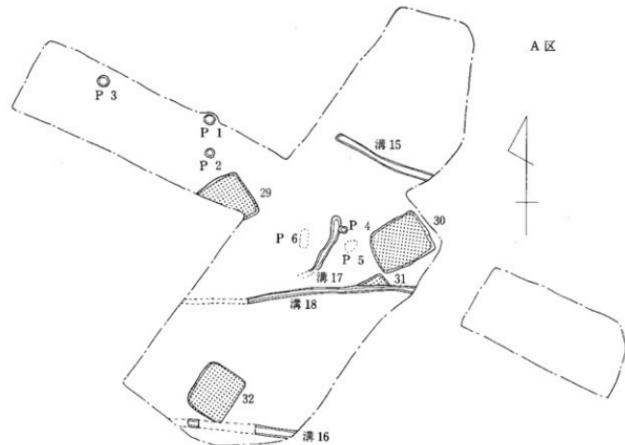
(1). 遺構

弥生式土器を伴う住居跡	7軒	(A区…4軒、B区…2軒、C区…1軒)
古墳時代前期の住居跡	2軒	(C区…2軒)
奈良、平安時代の住居跡	22軒	(B区…19軒、C区…3軒)
時代の不明な住居跡	1軒	(B区)
土壤	1	(C区)
ピット	69	
井戸跡	2ヶ所(D区)	
溝状遺構	20条	

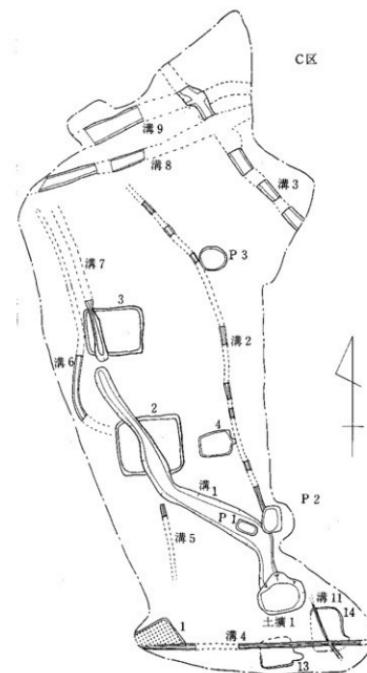
(2). 遺物

縄文時代の土器	コンテナパット	1箱
弥生時代の土器、石器	コンテナパット	7箱
古墳時代の土器	コンテナパット	3箱
奈良、平安時代の土器、砥石、鉄製品	コンテナパット	20箱
大觀通宝 1枚		

A・C区 遺構全体図



特図 3



0 20 m

B・D・E区 遺構全体図

挿図4

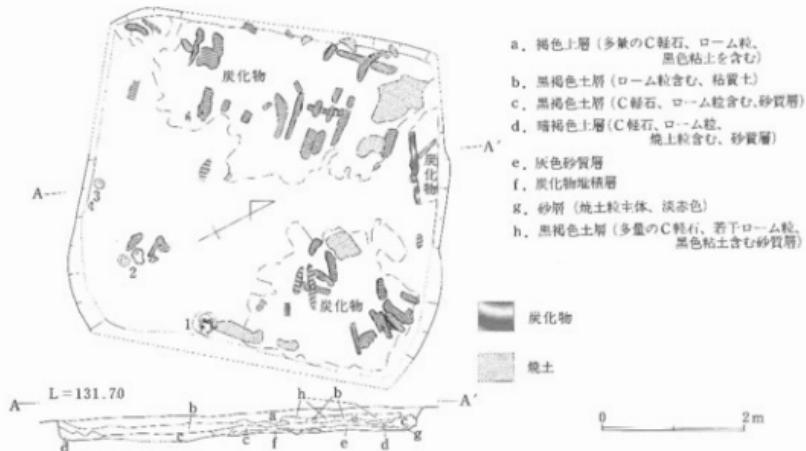


(3) 住居跡

① 弥生式土器を伴う住居跡

32号住居跡

挿図 5



本住居はA区最南端に位置し、東側を小河川が流れているためか、床面近くは砂質層で埋められており、床面は暗褐色の粘土質で、あまり固くなく、しっかりしていなかったが、炭化物が多量に出土していることから床面と認めることができた。同様にして、東壁、西壁の一部も不明瞭であったが、住居の範囲を確認できた。柱穴と思われるピットや炉跡等は確認できなかったが、住居北側や東壁付近から、大量の焼土が検出された。以上のように、住居のはば全域から大量の炭化物や焼土が検出されていることから火災住居であると考えられる。

遺物は、南壁中央から高壙が、東壁やや南寄りから弥生式土器の壺が、また南東隅から弥生式土器の甕が、それぞれ床着で出土した。



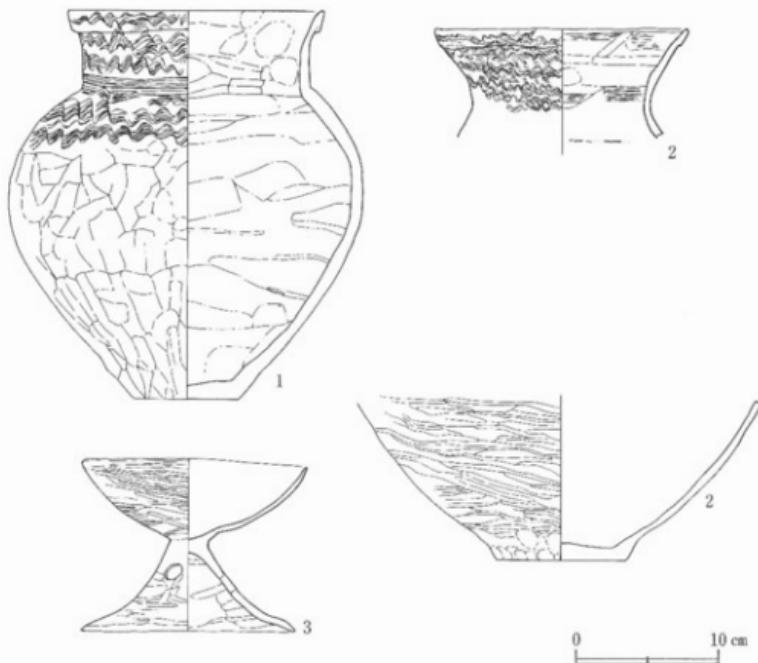
図版 1 32号住居遺物出土状態



32号住居炭化物出土状態

32号住居 出土遺物実測図

挿図 6



32号住居 出土遺物一覧表

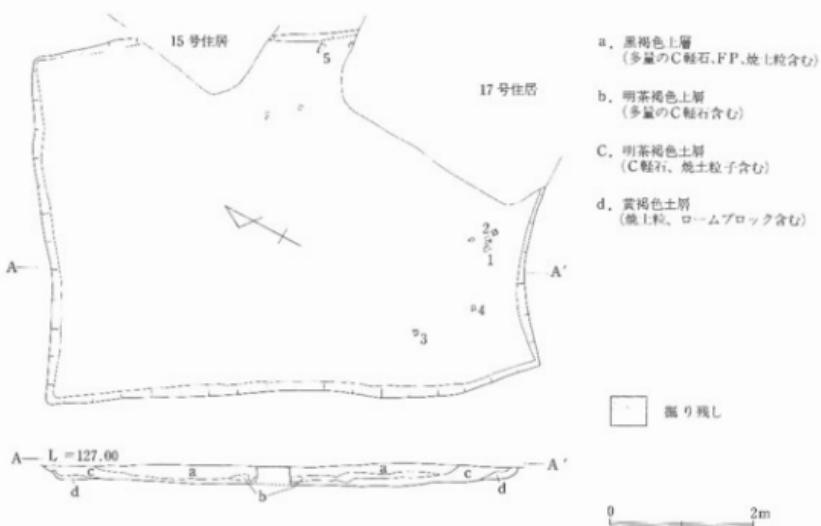
番号	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 土	備 考
1	壺	口径 17.5 底径 7.0 器高 26.7	口縁部ナデ後、折り返し口縁部彌歯6.7本の波状文1段、口縁部彌歯6.7本の波状文2～4段、頭部7～9本の3連止縫状文、胴へラ磨き、内面丁寧なヘラ磨き	石英、砂粒、白色粒子、小石含有	色調明褐色、胴部上半黒ずむ、内面茶褐色、焼成良好 80%残 口縁部に指圧痕
2	壺	口径 17.6 底径 9.0	折り返し口縁4本の波状文、口縁ハケ目後4本の波状文4～5段、胴部下半丁寧なヘラ磨き、内面口唇部横ナデ、口縁～頭部へラ磨き、胴部下半ナデ、輪積模あり、底部付近指圧痕	小石、白色粒子、砂粒含有	色調淡明褐色、内面一部黒ずむ、焼成良好、胴部上、中半を欠く
3	高杯	口径 15.5 脚径 14.8 器高 11.9	杯部外面へラ磨き、内面ナデ、脚部外面へラ磨き、内面ナデ	若干の小石含有	色調淡茶褐色 焼成良好、円窓3コ 完形



国版2 出土遺物

16号住居跡

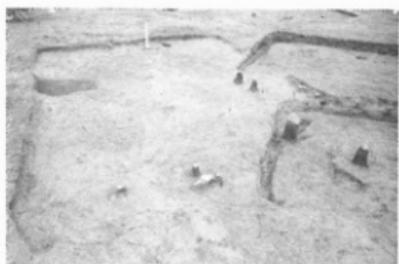
挿図7



本住居は、B区中央寄りに位置し、プランは南北に長い長方形を呈する。壁は約70°の角度で掘り込まれているが、上部は耕作等により擾乱されており、壁高は15cm前後と浅くなっている。また、東壁の一部が15号住居に、東壁及び南壁の一部が17号住居に、それぞれ切られている。床面は、固くしまっており、東側から西側へ約10cmの差で傾斜している。住居を埋めていた上には、大量のC軽石が含まれておらず、床面近くでは、焼土粒を混入した土に覆われていたが、特に炉跡であるとは認められなかった。また柱穴も検出できなかった。遺物は、住居東側及び南側に、わずかに出土したにすぎない。東壁際中央付近では磨製の石斧が出土し、南壁付近からは、口縁部から胴部にかけて縞状文や縄文の文様がある甕や、胴部に縄文の文様がある甕と思われる土器片が出土している。また、南壁西寄りの所では、折り返しを持つ口縁部が破片で出土した。



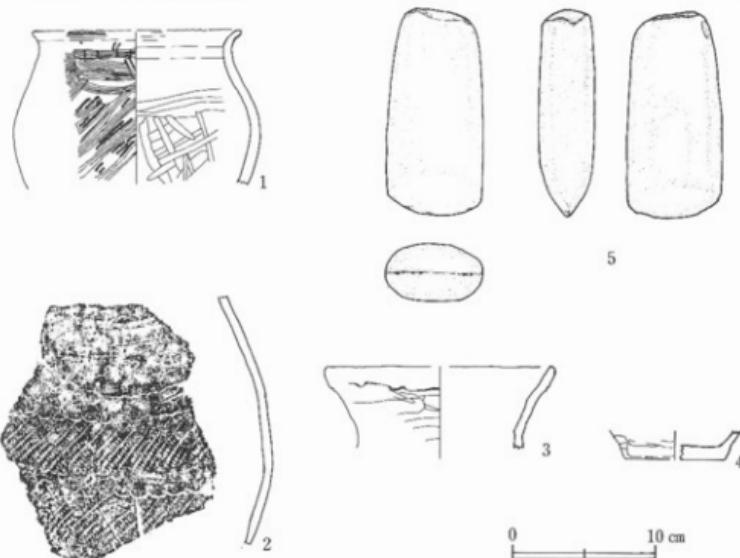
図版3 16号住居 遺構全景



16号住居遺物出土状態

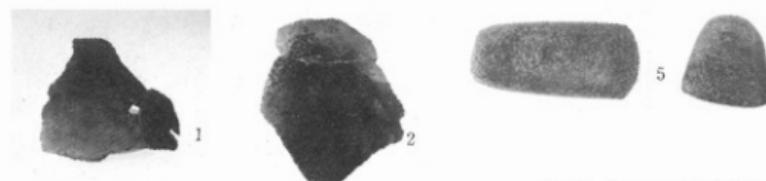
16号住居 出土遺物実測図

挿図 8



16号住居 出土遺物一覧表

番号	器種	法量 (cm)	技 法 等	胎 土	備 考
1	甌	口径 14.0 (推定)	口唇部 繩文による施文 刻目 口縁部 楊齒 3~4本の簾状文, 繩文底 頂部 楊齒 4本多連止簾状文1段(左まわり), 胸部は 繩文による施文後楊齒 4本簾状文(上から横方向→縱斜め方向) 内面 口縁部ナデ 胸部粗い磨き	白色粒子 砂粒 含有	色調口縁部黒色, 胸部 灰褐色 内面灰褐色 焼成良好
2	甌		胸部粗い磨き後 繩文による施文 内面横 方向への粗い磨き	白色粒子 砂, 砂粒 含有	色調茶褐色, 二次焼成 あり, 焼成良好
3	甌	口径 17.6 (推定)	折り返し口縁部ナデ, 口縁部ナデ, 指圧痕 顯著, 内面磨き 内, 外面とも器面が荒れ ている	白色粒子 雲母 小 石 含有	色調灰茶色 口縁部にスス付着 焼成良好 口縁部のみ
4	甌	底径 7.0 (推定)	底部付近ヘラ磨き 底部ヘラ磨き 器面荒 れる 内面ヘラ磨き	白色 粒子, 礫 含有	色調茶褐色 焼成良好 底部のみ残
5	磨製 石斧	長さ 14.3 厚さ 3.9 (最大) 幅 6.7~5.0	蛤刀 蛇紋岩か? かなりよく磨かれている, 刀先は鋭い		



図版 4 16号住居 出土遺物

1号住居跡

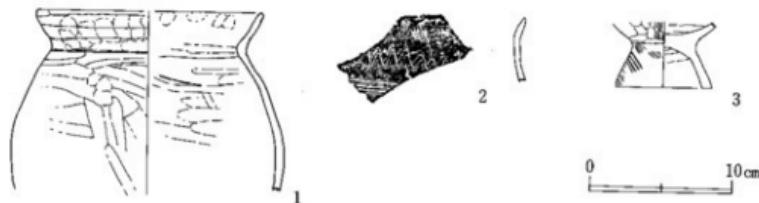
挿図9



本住居は、C区最南端、舌状台地縁辺部に位置し、住居南西部は現在、道路になっているため、切られており、北壁、東壁の一部、北東隅の壁が確認できたのに留まり、プランは不明である。さらに柱穴や炉跡等も検出できなかった。また、溝4が住居内を東西に走っている。住居北側からは大量の炭化物が出土しており、火災住居の可能性がある。遺物は住居北側から出土しており、樽式土器と思われる簾状文や波状文が施された甕の口縁部や、石田川式土器と思われる台付甕の脚部、粘土紐を巻きあげた甕の口縁部が、それぞれ床着で出土した。

1号住居 出土遺物実測図

挿図10



1号住居 出土遺物一覧表

番号	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 土	備 考
1	甕	口径 15.5 (推定)	口縁部粘土紐まきあけ後横ナデ、指圧痕顯著、胴部ハケによるナデ 内面口縁部横ナデ、胴部ハケ目	細かい砂粒 黒色 微粒子含有	色調茶褐色、内面淡褐色 焼成良好、胴部内面に輪横残る
2	甕		口縁部ハケ目後施文、櫛歯 2、3本の波状文 1段、5、6本の波状文 1段、簾状文、内面ヘラ磨き	石英、橙褐色粒子 白色粒子含有	色調暗茶褐色、焼成良好 口縁部のみ
3	台付甕	脚径 6.7	脚部ハケ目、指による整形、胴部ヘラ削り、脚部内面ヘラ削り	石英、雲母、砂粒含有	色調淡褐色、焼成良好 胴部内面荒れる、脚部完形

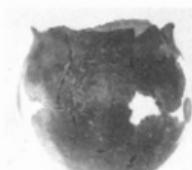
②. 古墳時代の住居跡

2号住居跡

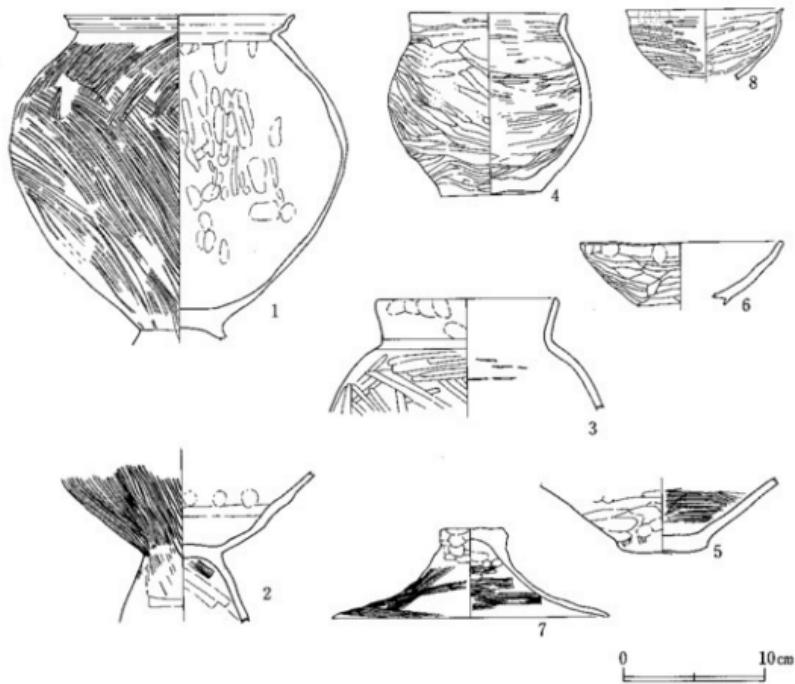
挿図 11



本住居はC区南部に位置し、そのプランは隅丸長方形を呈す、規模は $6.7 \times 5.3m$ と東西に長く、本遺跡地最大の住居である。周溝は床面から5cm前後と浅く住居を巡っている。東壁際及び南壁、北壁際の一部には、床面から高さ7cm位の帯状の微高地が続いている。また、住居中央を溝1が南北に走り、北壁と南壁の一部を切っている。柱穴は4本とも、ほぼ対角線上にのり、ともに径50cm前後、深さ30cm前後である。東壁中央付近からは焼土が検出されたが、炉跡であるとは確定できなかった。遺物は、北壁際中央から台付甕や小型甕が出土し、また、北東隅からは高环の脚部が、北東の柱穴からは小型甕が、南西の柱穴からは高环の环部、土師器の碗が出土した。



図版5 遺構全景及び出土遺物



2号住居出土遺物実測図

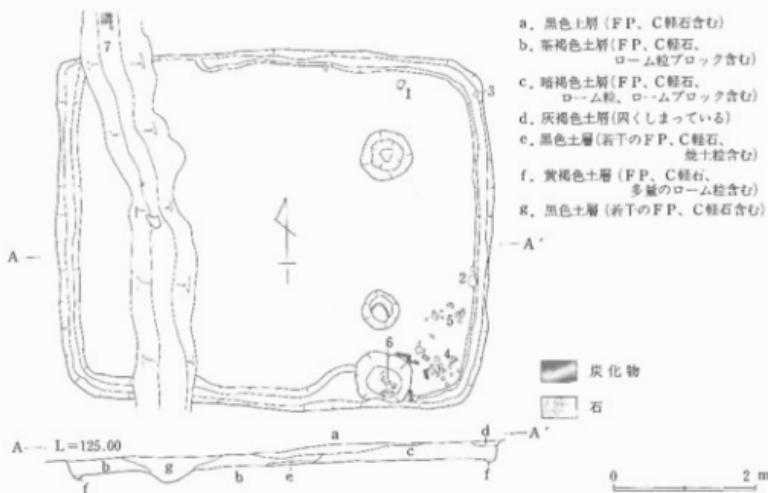
插図 12

2号住居 出土遺物一覧表

番号	器種	法量 (cm)	技 法 等	胎 土	備 考
1	台付 甕	口径 16.0 現高 22.9	S字口縁内外面横ナデ、肩部～胴部上半 は下方斜め左方向へハケ目、胴部中下半 は下方斜め右方向へハケ目、内面指による 整形、脚部ハケ目顯著	小石、砂 粒含有	色調灰褐色、焼成良好 脚部に二次焼成底、器 肉薄い、90%残
2	台付 甕		胴部下半下方斜め右方向のハケ目、脚部は ハケ目が薄、器肉薄い、内面指による整形 顯著	小石、雲 母、砂粒 含有	脚部黒褐色、脚部明褐色 底部内面黒灰色、燒 成良好、口縁、胸部上 半欠く
3	甕	口径 12.7	口縁部横ナデ、胴部上半粗いヘラ磨き 内 面横ナデ、胴部内面輪横底顯著	石英、砂 粒含有	色調外面茶褐色、内面 淡褐色、燒成良好
4	小型 甕	口径 11.0 底径 6.8 器高 12.6	口縁～頸部横ナデ、胴、底部ヘラ磨き や 器面荒れる。内面丁寧なヘラ磨き 若干 上げ底	石英、雲 母、小石 含有	色調外面黒褐色 底部 内面淡褐色 燃成良好 90%残
5	甕？	底径 6.2	胴部下半ナデ、指圧底顯著、底部ハケによ るナデ、内面ハケによるナデ横方向顯著、 若干の上げ底	石英、雲 母、小石 含有	色調淡褐色、内面黒色、 燒成良好
6	高坏	口径 14.2	环部、ヘラ磨き 口唇部付近に指圧痕、内 面横ナデ	多量の石 英 小石 砂粒 含 有	色調淡褐色 内面淡褐 色 燃成良好 脚部欠 く 内面荒れる
7	高坏	脚径 19.2	脚部上半ハケ目後ナデ 脚部下半細かなハ ケ目文、内面細かなハケ目文密 福の広が りがゆるやか	石英 砂 粒 含 有	色調 淡褐色 燃成良 好、环部欠く
8	甕	口径 11.1	口縁部、体部ヘラ磨き、口縁部に指圧底顯 著、内面ヘラ磨き、底部を欠く、口縁部や 外反する	石英、多 量の小 石、砂粒、 白色粒子 含有	色調、明褐色、燒成良 好 50%残

3号住居跡

挿図 13



本住居は、C区中央やや西寄りに位置し、プランは隅丸長方形を呈す。規模は $6 \times 5\text{m}$ と東西に長い住居である。壁は約80°の角度で掘り込まれ、壁高は、耕作等による擾乱のためか、約20cmと浅い。床面は、ほぼ平坦で凹くしまっている。住居西側を溝7が南北に走り、北壁と南壁の一部がそれぞれ切られている。周溝は、床面から深さ10cm前後、幅20~30cmではば住居全域を巡っている。柱穴は、住居東側の2つが検出されたが、西側の柱穴は、溝によって住居が切られているため、確認できなかった。また、貯蔵穴と思われるピットが、南壁東寄りの所で検出された。このピットの東側に若干の炭化物が散布していたが、炉跡とは認められなかった。

遺物は、住居東側に集中して出土し、北壁付近では台付甕(脚部)や甕の口縁部が、南壁及び東壁付近では小型甕等が、また、貯蔵穴からはS字状の口縁部の破片が出土した。



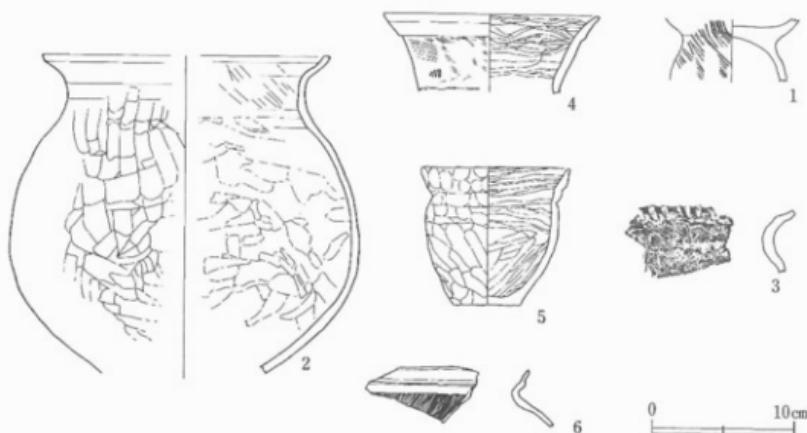
図版 6 3号住居 遺構全景



3号住居遺物出土状態

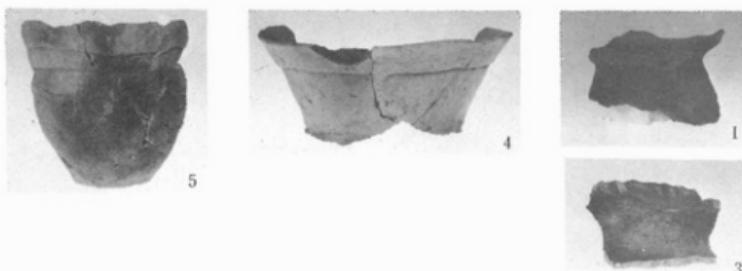
3号住居 出土遺物実測図

図版 14



3号住居 出土遺物一覧表

番号	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 土	備 考
1	台付 甕		胴部下半～脚部ハケ目 内面荒れている。	石英、砂 粒含有	色調、淡褐色、焼成良 好 脚部のみ残
2	甕	口径 19.6 (推定)	口縁部ナデ、「コ」の字状を呈す。胴部ヘラ によるナデ、内面口縁部ハケ目、胴部ナデ。	小礫、石 英、砂粒 含有	色調淡褐色、口縁部や や黒ずむ。焼成良好
3	甕		口唇部斜口目文 口縁部横ナデ。ハケ目文 内面ナデ ハケ目文	雲母、砂 粒含有	色調外面暗褐色、内面 淡褐色、焼成良好
4	壺 か?	口径 14.9	折り返し口縁部横ナデ。口縁～頸部にかけて横、斜め方向のハケ目文、内面丁寧なハ ラ磨き	小礫、砂 粒 ガラス質粒子 含有	色調淡褐色、内面一部 黒ずむ。焼成良好。
5	小型 甕	口径 10.1 底径 4.6 器高 9.4	口縁部粘土紐まきあげ後ナデ、指圧痕著者。 胴部上半に輪積痕残る。胴部、底部ヘラ磨 き、内面丁寧なヘラ磨き	砂粒、小 石含有	色調淡褐色、胴部一部 黒色 内面赤褐色。燒 成良好
6	甕		S字状口縁を持つ。口縁部横ナデ。胴部上 半ハケ目、内面ナデ	石英、小 石含有	色調黑褐色 燃成良好

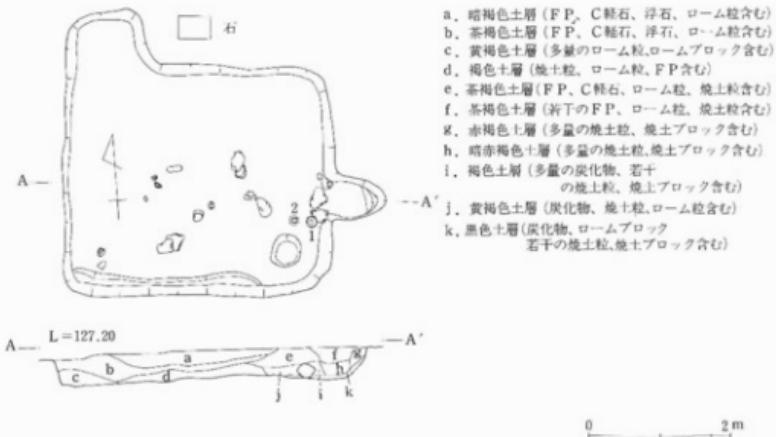


図版 7 3号住居 出土遺物

③ 奈良・平安時代の住居跡

6号住居跡

挿図 15



B区北西部に位置し、プランは長方形で北壁西端に1.2m×0.8mの張り出しを持つ。周溝は南壁下を巡っている。床面は、張り出し部も含め平坦であり、固くしまっている。竈は東壁やや南寄りに作られ、両袖に自然石を使用している。貯蔵穴は竈右側にあり、住居中央には敷石と思われるような偏平な石が床面に埋め込まれていた。遺物は竈右袖付近から土師器の环と須恵器の高台壇(高台部)が出土した。

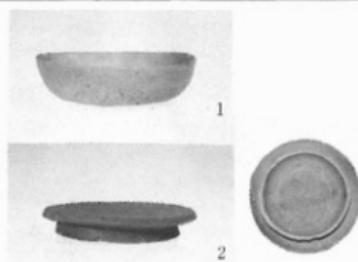
挿図 16 遺物実測図

6号住居 出土遺物一覧表

番号	器種	法量 (cm)	技 法 等	胎 土	備 考
1	环	口径 12.1 器高 3.2	L口縁部横ナデ、体部へラ削り、指圧痕顯著。底部不定方向へラ削り、内面ナデ	細かい砂粒 ガラス質粒子含有	色調淡褐色、焼成良好 完形、ほぼ平底
2	須恵器 高台付属	高台径 8.6	回転クロコ整形、底部回転糸切り後高台貼付 内、外面ロクロナデ	小石、白色 粒子含有	色調青灰色、焼成良好 高台部としては完形



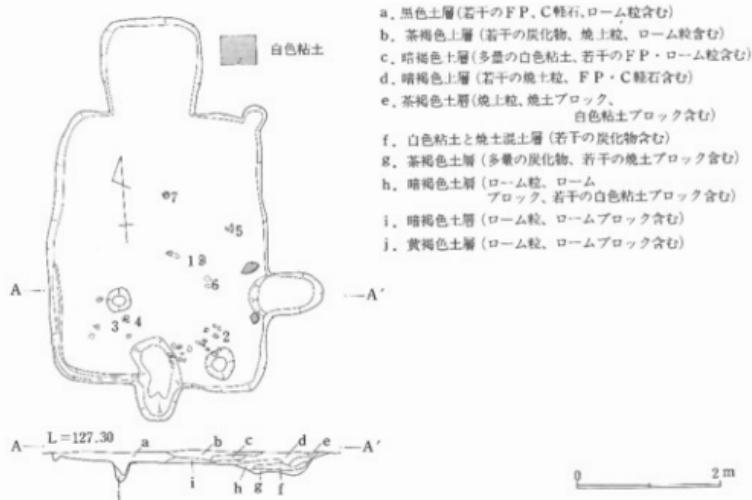
図版 8 6号住居 遺構全景



図版 9 6号住居 出土遺物

7号住居跡

挿図 17



本住居はB区北部に位置し、そのプランは南北に長い長方形で、北壁中央に 1.4×1.4 mの張り出しが持つ。耕作等による搅乱を受けているため、壁高は20cm前後と浅い。周溝は床面から3cm前後の深さで、南壁中央から西壁中央にかけて巡っている。床面は西側から東側へわずかに傾斜している。張り出し部も床面の高さと同じである。竈は東壁南寄りに作られ、両袖には多量の白色粘土が使用されている。煙道部及び燃焼部からは大量の焼土が検出され、その使用頻度の高さを示している。南壁中央にも竈のような張り出しが見られるが、竈として使用された痕跡はない。貯蔵穴は右袖付近、南東隅に検出された。遺物は、住居中央から南側にかけて集中して出土したが、張り出し部分からの遺物はなかった。竈前及び竈付近からは土師器の壺、貯蔵穴付近からは、土師器の壺、甕の胸部分と思われる破片が出土した。また、中央から須恵器の高台付壠（高台部）が出土した。



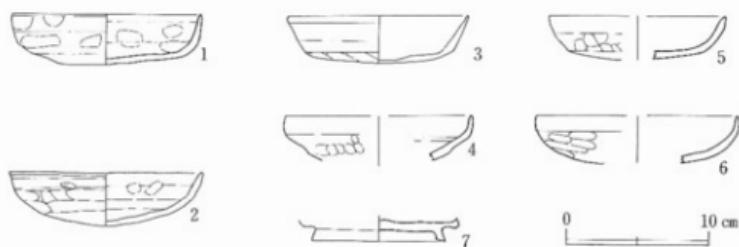
図版 10 7号住居 遺構全景



7号住居 遺物出土状態

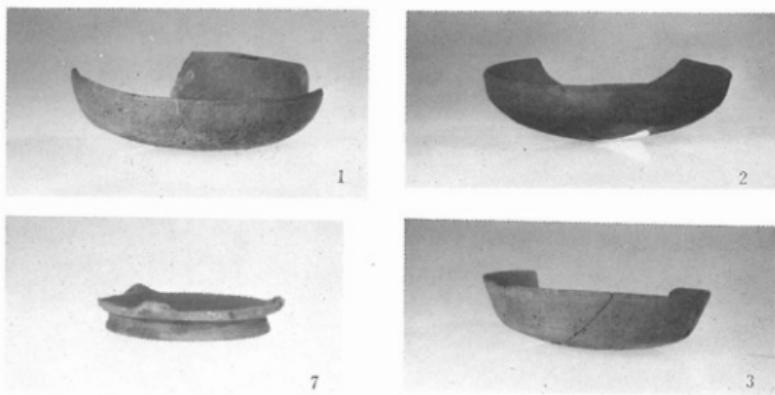
7号住居 出土遺物実測図

挿図 18



7号住居 出土遺物一覧表

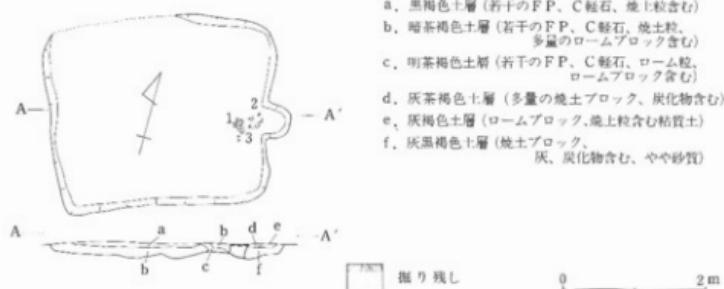
番号	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 土	備 考
1	壺	口径 13.0 器高 3.5	口縁部横ナデ。体部、底部不定方向ヘラ削り。体部に指圧痕顯著、内面ナデ。	砂粒、若干の小石含有	色調外面淡褐色、内面淡赤褐色、焼成良好80%残 ほぼ平底
2	壺	口径 13.2 器高 3.5	口縁部横ナデ。体部、底部横方向の粗いヘラ削り、内面ナデ、指圧痕あり。	若干の砂粒、小石含有	色調淡褐色、体部~底部黒色、焼成良好80%残 残 丸底
3	壺	口径 12.4 器高 3.3	口縁部~体部横ナデ、底部不定方向ヘラ削り、内面ナデ、内面やや荒れている	石英、砂粒含有	色調淡褐色、焼成良好80%残 ほぼ平底
4	壺	口径 13.0 (推定)	口縁部横ナデ、体部ヘラ削り、体部に指圧痕顯著、内面横ナデ	砂粒、小石含有	色調明褐色 口縁一部黒色、焼成良好
5	壺	口径 12.2 (推定)	口縁部横ナデ、体部ナデ、指圧痕顯著、底部不定方向ヘラ削り、内面横ナデ	砂粒、若干の小石含有	色調淡褐色、焼成良好 ほぼ平底
6	壺	口径 14.0 (推定)	口縁部横ナデ、体、底部ヘラ削り、内面横ナデ	砂粒、小石含有	色調明褐色、焼成良好
7	須恵器 高台付壺	高台径 9.2	回転ロクロ整形、底部回転糸切り後高台貼付、内、外側ロクロナデ	微粒子、砂粒、含有	色調青灰色、焼成良好 高台部としては完形



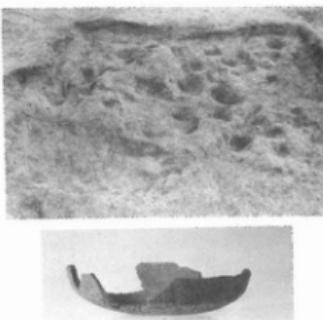
図版 11 7号住居 出土遺物

12号住居跡

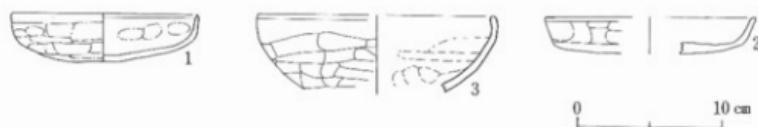
挿図 19



本住居は、B区中央やや北寄りに位置し、そのプランは長方形を呈す。耕作等による擾乱が激しく北壁が不明瞭であり、壁高も10cm前後である。窓は東壁やや南寄りに作られ、燃焼部、煙道部ともよく焼けており、大量の焼土ブロックや炭化物が検出され、その使用頻度の高さを示している。煙道部はあまり住居外へ延びておらず、両袖は擾乱のためか、はっきり認められなかった。床面も木の根による擾乱か、凸凹が激しく、柱穴は認められなかった。遺物は窓内及び窓周辺に集中して出土した。そのほとんどが土師器の壊であったが、若干の土師器の甕の破片も出土した。



図版 12 遺構全景及び出土遺物



12号住居 出土遺物実測図

挿図 20

12号住居 出土遺物一覧表

番号	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 土	備 考
1	壺	口径 13.0 器高 3.2	口縁部横ナデ、体、底部不定方向ヘラ削り。 体部内外に指圧痕顯著。	砂粒、微 粒子 含有	色調褐色、焼成良好 80%残
2	壺	口径 14.6 (推定) 器高 2.5	口縁部～体部横ナデ、底部ヘラ削り、ヘラ 調整、内面横ナデ	石英、砂 粒、雲母、 含有	色調外面淡褐色、内面 淡桃色、焼成良好。平 底
3	甕	口径 16.2 (推定)	口縁部横ナデ、体、底部不定方向ヘラ削り、 内面ナデ、指圧痕あり	石英、砂 粒 小 石 含有	色調 淡桃褐色、焼成 良好。



本住居は、B区中央西寄りに位置し、プランは長方形を呈する。床面は、北から南へ若干傾斜している。周溝は竈周辺や西壁中央を除き、床面から3cm前後の深さ、幅20cm前後で住居を巡っている。住居の周辺には、いくつかのピットが検出され、柱穴の可能性を残しているが、この住居につくものであるとは断定できない。竈は東壁やや南寄りに作られ、煙道部は住居外へかなり長く伸びている。両袖及び支脚には石材が使われており、燃焼部、煙道部はともにあまり焼けていない。東壁北側や西壁中央から焼土が、南東隅からは炭化物が検出された。竈内及び竈の前、住居北側や南側から土師器の壊が、また、住居南側から須恵器の蓋が出土した。



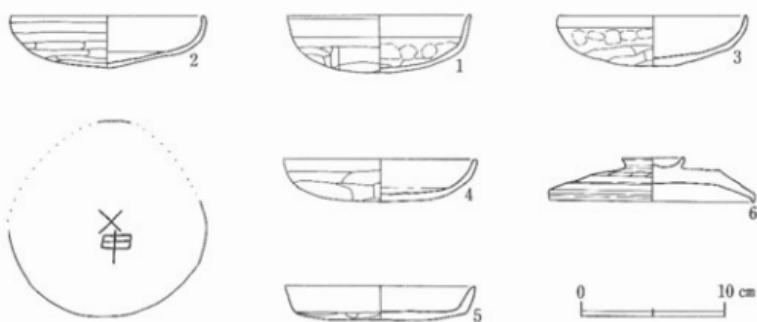
图版 13 20号住居 遗構全景



20号住居遺物出土状態

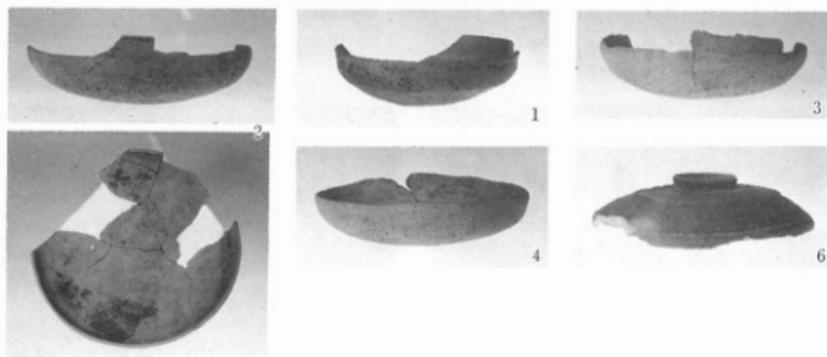
20号住居 出土遺物実測図

挿図 22

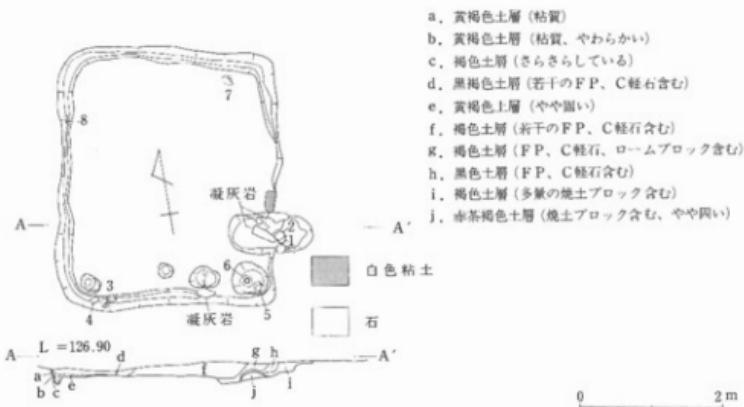


20号住居 出土遺物一覧表

番号	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 土	・ 備 考
1	環	口径 12.6 器高 3.9	口縁部横ナデ、体、底部不定方向へラ削り。 内面横ナデ、体部内面に指圧痕顯著。底部若干歪む。	小石、砂 粒含有	色調外面暗茶褐色、内 面褐色、焼成良好、80% 残
2	環	口径 13.4 器高 3.6	口縁部横ナデ、体部横方向へラ削り。底部 不定方向へラ削り 内面横ナデ、内面に「× 申」の印が刻まれている。	小石、砂 粒含有	色調淡明褐色、焼成良 好、70%残、底部若干 歪む
3	環	口径 13.0 器高 3.4	口縁部横ナデ、体部横方向へラ削り、指圧 痕顯著、底部へラ削り、へラ調整	多量の砂 粒含有	色調明褐色、焼成良好 80%残
4	環	口径 13.3 器高 3.2	口縁部横ナデ、体、底部へラ削り、へラ調 整、内面横ナデ	小石、砂 粒 微粒 子含有	色調褐色、焼成良好 ほぼ完形
5	環	口径 13.0 器高 2.3	口縁、体部横ナデ、底部へラ削り、へラ調 整、内面横ナデ	小石、砂 粒含有	色調淡褐色、焼成良好 平底
6	須恵 器蓋	口径 13.9 器高 3.0	ロクロ整形、回転へラ削り後ツマミ貼付 内、外面ロクロナデ、一部指圧痕あり。	石英、砂 粒 小石 含有	色調外面青灰色、内面 灰色、焼成良好



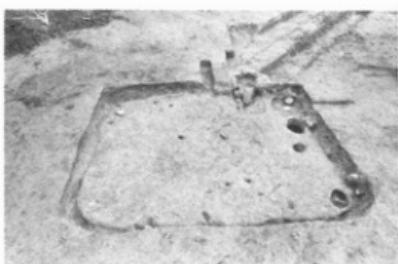
図版 14 20号住居出土遺物



本住居は、B区中央東寄りに位置し、22号住居と並列している。プランは隅丸長方形を呈する。壁は約70°の傾斜で掘り込まれているが、上部は耕作等により擾乱され、壁高は15cm前後と浅い。床面はほぼ平坦であり、周溝は竈付近を除き、深さ8cm前後、幅20cm前後で住居内を巡っている。竈は東壁南寄りに作られ、煙道部は住居外へかなり長く延びている。袖には凝灰岩等の石材が使われ、また、白色粘土が竈内から大量に出土していることから、石材と粘土で構築されたものであろう。燃焼部、煙道部はともによく焼けており、使用頻度の高さを示している。貯蔵穴は竈右側一住居南東隅に検出された。プランはほぼ円形で、深さは床面から37cmである。また住居内に3つのピットが検出されたが、柱穴と認めるまでは至らなかった。なお、一番東側のピット南から凝灰岩が出土している。遺物は主に住居南側から集中して出土した。竈内からは、ほぼ完形の土師器の环が、貯蔵穴の上部からは完形の須恵器が出土した。また、南西隅からも土師器が出土し、西壁際からは砥石が、北壁付近からは須恵器の蓋が出土した。



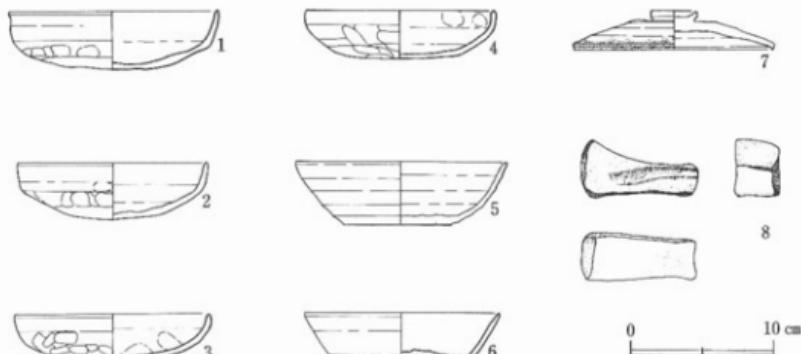
図版 15 21号住居 遺構全景



21号住居 遺物出土状態

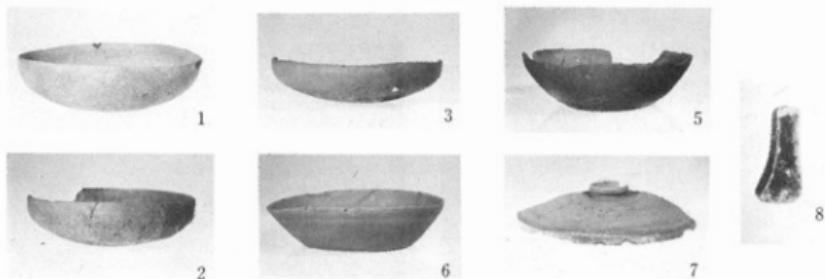
21号住居 出土遺物実測図

挿図 24



21号住居 出土遺物一覧表

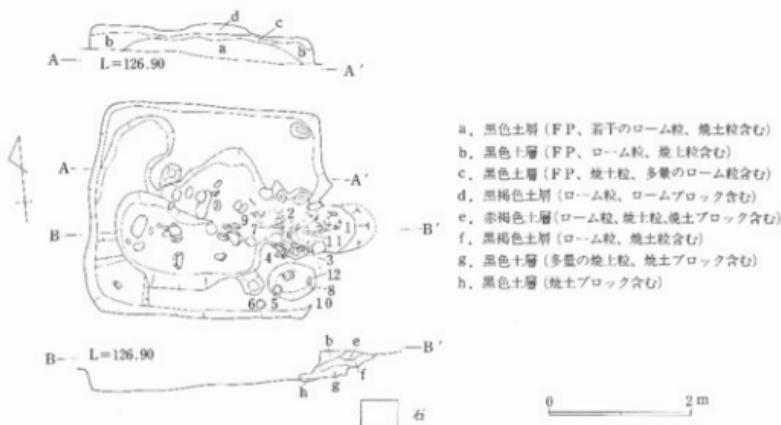
番号	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 土	備 考
1	坏	口径 14.3 器高 4.0	口縁部横ナデ 体部ナデ, 底部ヘラ削り, ヘラ調整, 体部に指圧痕顯著, 内面横ナデ	多量の砂 量含有	色調淡茶褐色, 焼成良好, 完形
2	坏	口径 13.0 器高 3.9	口縁部横ナデ, 体, 底部ヘラ削り, ヘラ調 整, 体部に指圧痕顯著, 内面横ナデ	砂粒, 微 粒子含 有	色調外面淡褐色, 内面 赤褐色, 90%残
3	坏	口径 13.6 器高 3.3	口縁部横ナデ, 体, 底部不定方向ヘラ削り, 内面横ナデ 指圧痕あり	砂粒, 微 粒子含 有	色調赤褐色, 焼成良好 50%残
4	坏	口径 12.8 器高 3.4	口縁部横ナデ, 体, 底部ヘラ削り, 内面横 ナデ 内面に指圧痕顯著	石英, 砂 粒含有	色調茶褐色 焼成良好
5	須恵 器坏	口径 14.5 底径 7.6 器高 4.3	右回転ロクロ整形 底部回転ヘラ切り後調 整, 外, 内面ロクロナデ	小石, 砂 粒含有	色調外面黒褐色, 内面 灰褐色, 焼成良好 90%残
6	須恵 器坏	口径 13.3 底径 9.1 器高 3.3	右回転ロクロ整形, 底部回転ヘラ切り未調 整, 外, 内面ロクロナデ	細かい砂 粒含有	色調灰色, 焼成良好 完形, 全体的に歪み
7	須恵 器蓋	口径 13.8 器高 2.7	右回転ロクロ整形, 切り離し後ツマミ貼付, ロクロナデ, 自然釉がかかる	多量の微 粒子含有	色調灰色, 焼成良好, 重ね焼き痕あり
8	砥石	長さ 8.2	四面にわたって使いこんでいる		色調褐色



図版 16 21号住居 出土遺物

22号住居跡

挿図 25



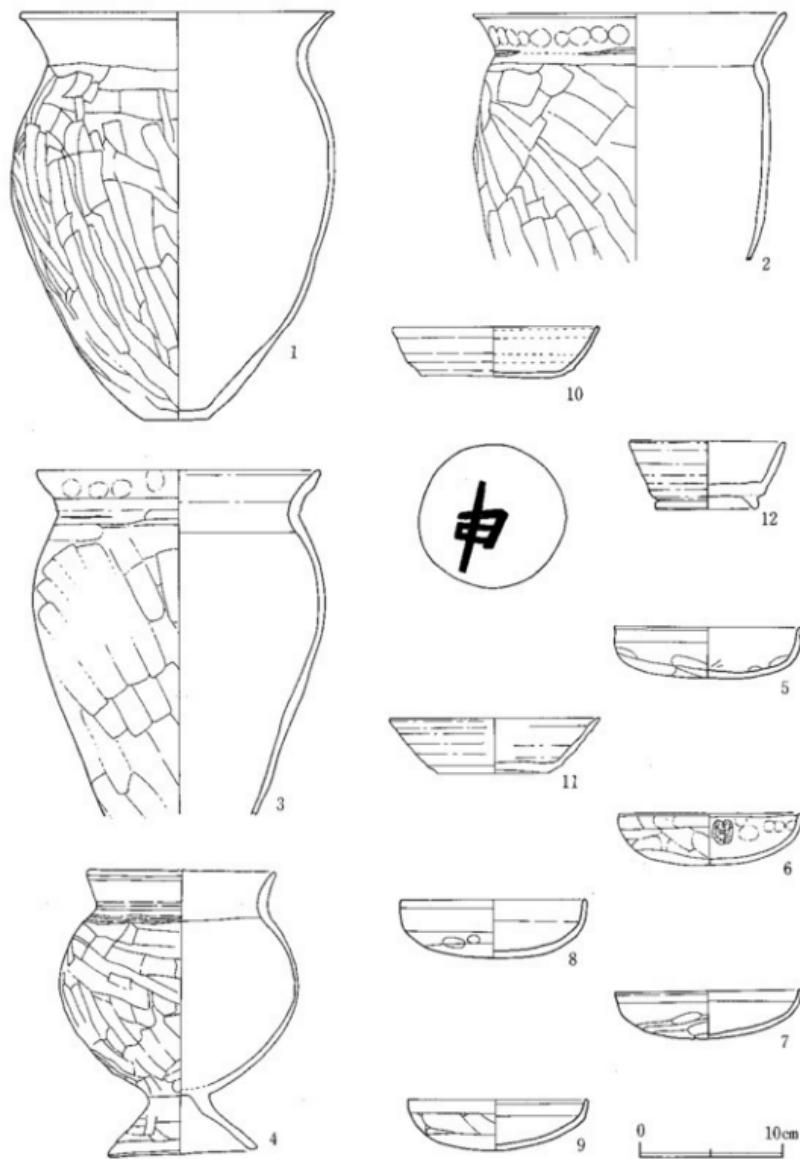
本住居は、B区中央やや南東に位置し、長方形のプランを呈する。壁はほぼ80°で掘り込まれ、床面中央は、壁際に比べやや低くなっている。竈は東壁中央やや南寄りに作られ、煙道部は住居外へかなり伸びている。向袖には安山岩を使用し、貯蔵穴東側に出土した長形の焼石も、この竈に使用されていたと思われる。また、燃焼部、煙道部ともよく焼けており、使用頻度の高さを示している。貯蔵穴は住居南東隅に楕円形に掘られている。また、北東隅にも楕円形のビットが掘られているが、柱穴と思われるものは認められなかった。住居中央には、床面よりやや高い位置で河原石が大量に散布していた。遺物は、竈内、竈の前及び周辺や住居南側半分に集中して出土した。竈内では、ほぼ完形の土師器の甕が出土し、竈の前では、土師器の甕、脚付甕、壺及び須恵器の壺が出土した。また、貯蔵穴内及びその周辺からは多くの土師器の壺、須恵器の壺、高台付壺が出土した。住居中央の周囲から一段低くなっている部分からも、灰、炭化物、焼土ブロックとともに、土師器の壺や甕の破片が出土した。



図版 17 22号住居 遺構全景



22号住居遺物出土状態

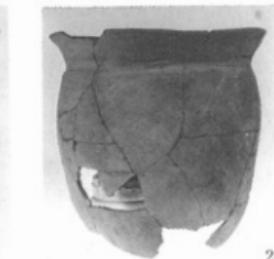
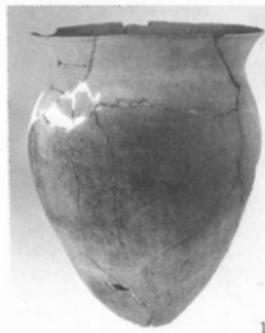


22号住居 出土遺物実測図

挿図 26

22号住居 出土遺物一覧表

番号	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 土	備 考
1	鏡	口径 21.2	口縁部横ナデ、胸部縱斜め方向へラ削り 底部へラ削り、内面ナデ。口縁部に若干の指圧痕あり、器内薄い。	多量の砂粒、微粒子含有	色調淡赤褐色。胸部下半～底部二次焼成 90%残 焼成良好
2	甕	口径 21.6	口縁部～肩部横ナデ、指圧痕顯著、胸部上半横方向へラ削り、胸腹部中半縦斜め方向へラ削り、内面に輪積状、器内薄い。	多量の砂粒 含有	色調赤褐色、焼成良好 60%残
3	甕	口径 18.4	口縁部横ナデ、指圧痕顯著、頭部に輪積状、肩部横方向へラ削り、頭部中半縦斜め方向へラ削り、内面ナデ、器内薄い。	多量の砂粒 微粒子含有	色調淡赤褐色。焼成良好
4	脚付甕	口径 13.0 脚径 10.2 器高 19.5	口縁部横ナデ、胸部上半横方向へラ削り、胸腹部中半縦斜め方向へラ削り、脚部ナデ、指圧痕 内面ナデ	多量の砂粒若干の小石含有	色調赤褐色、焼成良好 80%残
5	甕	口径 13.0 器高 3.5	口縁部横ナデ。体、底部不定方向へラ削り、内面ナデ、指圧痕あり	砂粒 含有	色調淡褐色、焼成良好 完形
6	甕	口径 12.6 器高 3.6	口縁部横ナデ。体、底部不定方向へラ削り、内面横ナデ、指圧痕、木の葉痕あり 口唇部内壁	砂粒 含有	色調外面褐色、内面赤褐色、焼成良好 完形
7	甕	口径 13.0 器高 3.2	口縁部横ナデ、体、底部不定方向へラ削り、内面横ナデ、体部に若干の指圧痕、内面	雲母、砂粒	色調褐色、焼成良好は ば完形
8	甕	口径 13.1 器高 4.0	口縁部横ナデ。体、底部不定方向へラ削り、体部に指圧痕、内面横ナデ	砂粒 含有	色調暗褐色、焼成良好 90%残
9	甕	口径 12.3 器高 3.5	口縁部横ナデ。体、底部不定方向へラ削り、口唇部内壁、内面ナデ	砂粒、小石 含有	色調外面褐色、内面赤褐色、焼成良好 完形
10	須恵器 甕	口径 14.1 底径 10.0 器高 3.3	右回転ロクロ整形、内外面ロクロナデ。 底部回転糸切り後、周辺部調整、墨書「中」	白色微粒子 砂粒、含有	色調外面灰褐色、内面赤褐色、焼成良好 90%残
11	須恵器 甕	口径 14.6 底径 7.6 器高 3.8	右回転ロクロ整形、内外面ロクロナデ 底部回転糸切り後調整	若干の微粒子 含有	色調灰褐色、焼成良好
12	須恵器 高台付甕	口径 10.9 高台径 7.2 器高 4.7	右回転ロクロ整形、内外面ロクロナデ。 底部切離し後高台貼付	若干の砂粒 含有	色調灰色、焼成良好 90%残



1

2

4



12



10



6



5



8

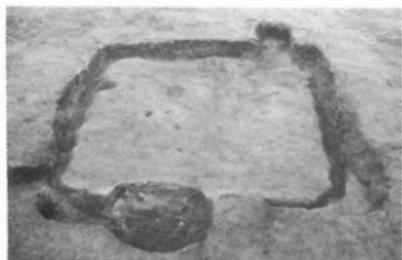
図版 18 22号住居 出土遺物

18号住居跡

挿図 27



本住居はB区中央西寄りに位置し、長方形のプランを呈する。壁は約60°の傾斜で掘り込まれ、床面はほぼ平坦である。住居西壁の一部がピットによって切られ、周溝は竈付近を除き、ほぼ住居を一周する。貯蔵穴や柱穴は検出されなかった。竈は東壁南寄りに作られ、煙道部は住居外にかなり延びている。竈内には大量の焼土、焼土ブロックをはじめ、灰や炭化物が検出されたことから、この竈の使用頻度の高さが窺える。遺物は竈内及び周辺に集中して出土した。竈内からは土師器の破片が破片で、しかも大量に出土し、周辺からは土師器の壊が出土している。なお、住居を切っているピットからは遺物の出土はなかった。



図版 19 18号住居 遺構全景



18号住居 竈周辺遺物出土状態

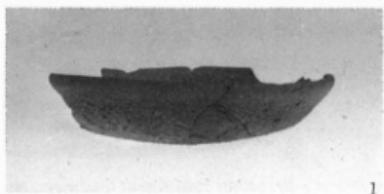


18号住居 出土遺物実測図

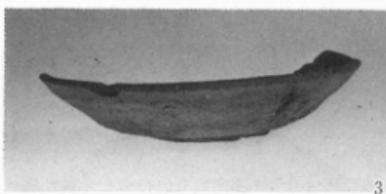
挿図 28

18号住居 出土遺物一覧表

番号	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 土	備 考
1	壺	口径 14.4 器高 2.9	口縁部横ナデ。体、底部不定方向へラ削り。 体部に若干の指圧痕、内面ナデ口唇部内彎	砂粒 含有	色調褐色、焼成良好。 80%残 ほぼ平底
2	壺	口径 13.6 器高 3.2	口縁部横ナデ。底部不定方向へラ削り。体、 底部に指圧痕顯著、内面ナデ	砂粒、小石 含有	色調淡褐色、焼成良好 ほぼ平底
3	壺	口径 14.6 底径 6.1 器高 3.6	ロクロ整形、底部回転糸切り未調整。体部 内外面、口縁部内面指圧痕顯著	砂粒、小石 含有	色調淡橙褐色、底部黒色、 焼成不良。体部に スヌ付着 上師質



1

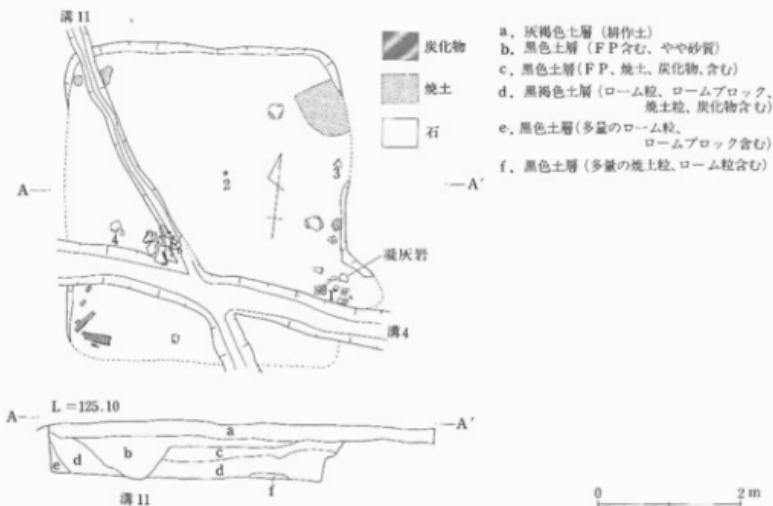


3

図版 20 18号住居 出土遺物

14号住居跡

挿図 29

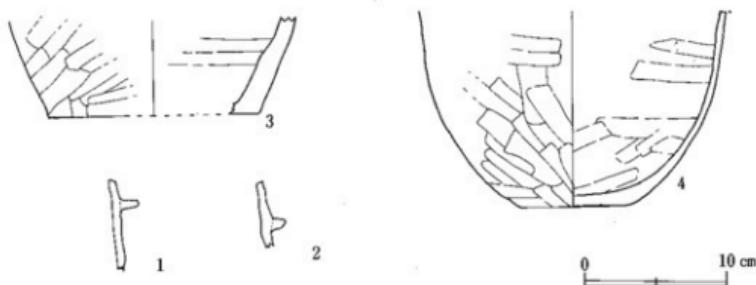


本住居は、C区南東端に位置し、プランはほぼ方形である。住居南側を溝4が東西に走り、住居西側を北西から南東に溝11が走り、それぞれ本住居を切っている。また、耕作等の擾乱のため住居南壁が不明瞭である。竈は溝4により切られているが、東壁南寄りに作られ、袖には凝灰岩を使用している。住居北西隅や北東隅から焼土が、南西隅や埋め土からは炭化物が、大量に出土している。

ことから、火災住居の可能性がある。遺物は竈内及び周辺に集中して出土しており、羽釜の口縁部や厚手の甕、あるいは土釜と思われる底部の破片が出土した。また、住居中央や南寄りのところでも羽釜の口縁部や甕、土釜、羽釜と思われる破片が点在している。

14号住居 出土遺物実測図

挿図 30



14号住居 出土遺物一覧表

番号	器種	法量(cm)	技 法 等				胎 土	備 考
			口縁部横ナデ	指圧痕あり	輪積痕あり	内面細かいハケ目あり		
1	羽釜						雲母 小石 砂粒 含有	色調 赤褐色 二次焼成痕あり
2	羽釜		口縁部指圧痕顯著	つばの上下にクシ目文			白色 粒子 小石 砂粒 含有	色調黒色、内面灰褐色 焼成良好
3	土釜?	底径 14.6 (推定)	胴部下半~底部付近縱斜め方向へラ削り				硬、石英、砂粒、小石 含有	色調淡褐色、内面茶褐色、胴部厚手、底部薄手、焼成良好
4	土釜?	底径 7.3	胴部下半縱斜め方向へラ削り、底部器面荒れる。内面ナデ(ハケによるナデ?)若干				石英、砂粒 含有	色調淡褐色、内面赤褐色、二次焼成痕あり、焼成良好、底部のみ

④ 住居跡一覧表

住居番号	形 状 壁 走 向	規 模 (m) (長壁×短壁)	床面積 (m) <small>(長壁×短壁)</small>	か ま ど		周溝	柱	貯藏穴	備 考	重複関係
				位置	つくり幅 (m)					
1	不明 N-35°-W	不 明 42	? ? ?	?	?	?	?	?	本文 参照	[1]→W-4
2	隅丸長方形 N-40°-W	6.7×5.3 39	35.51	-	-	○ ○ (4)	○	○	本文 参照	[2]→W-1
3	隅丸長方形 N-0°-W	5.9×4.9 20	28.91	-	-	○ ○ (3+4)	○	○	本文 参照	[3]→W-7
4	長 方 形 N-6°-W	3.4×2.8 19	9.52	東壁 中央	?	×	×	○ (4)	竈がW-2により切られている 土師塊(回転条切り)が出土	[4]→W-2
5	長 方 形 N-0°-W	3.6×3.3 7	11.88	東壁 南寄	粘土 65 [4+5]	○	×	×	竈内から土師甕出土	
6	長 方 形 N-5°-E	3.7×3.2 37	11.84	東壁 南寄	袖石 70 [4+5]	○	×	○ (4)	本文 参照	

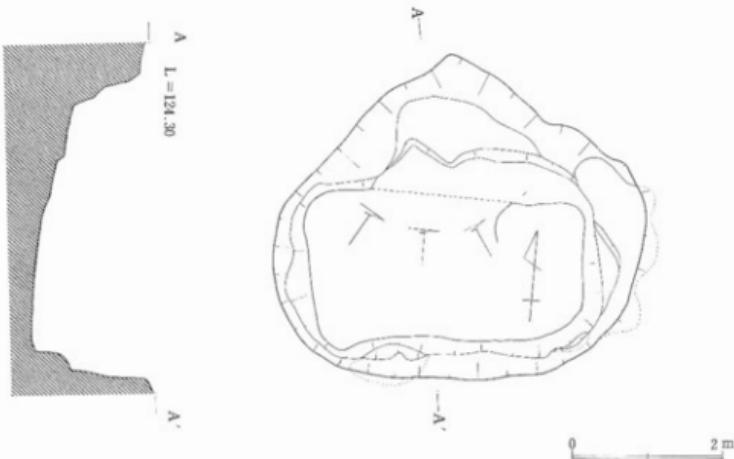
7	長方形 N-4°-E	3.8×3.0 22	11.4	東壁 南寄	白色粘土 60 (^上 _下)	○ ×	×	○ (^上 _下)	本文参照	
8	不明 N-4°-E	4.5×? 10	?	東壁 南寄	? 60	×	×	○ (^上 _下)	西壁は耕作等による擾乱のため 不明瞭	
9	長方形 N-7°-E	3.8×3.7 11	14.06	東壁 南寄	褐色粘土 70	○ ×	×	○ (^上 _下)	北西隅に張り出しあり 須恵壺、羽釜出土	
10	方形 N-8°-E	3.5×3.5 15	12.25	東壁 南寄	白色粘土 60	○ ×	○ (^上 _下)	床面が固くしまっている 鉄製品出土		
11	長方形 N-36°-W	6.1×4.5 14	27.45	—	—	×	○ (^上 _下)	×	弥生土器(樽系、赤井戸系共伴)出土 埋め土から多量のC軽石検出	
12	長方形 N-20°-W	3.0×2.5 18	7.5	東壁 南寄	粘土 50	×	×	×	本文参照	
13	不明 N-19°-W	3.2×3.0 13	9.6	東壁 南寄	? 70	?	?	?	床面が固くしまっている 「コ」の字口縁の甕出土	
14	長方形 N-4°-W	4.4×3.8 37	16.72	東壁 南寄	袖石 60	×	?	?	本文参照	
15	長方形 N-8°-E	4.4×3.8 31	16.72	東壁 南寄	袖石 70	○ ×	○ (^上 _下)	床面は固くしまっている 土師壺や土師甕が出土	16→13	
16	長方形 N-34°-W	6.8×4.8 17	32.64	—	—	×	×	×	本文参照	
17	長方形 N-3°-W	3.9×3.4 26	13.26	東壁 南寄	? 70	○ ×	○ (^上 _下)	貯蔵穴が竪右側に2つ検出 土師壺や土師甕が出土	16→12	
18	長方形 N-45°-W	3.2×3.0 18	9.6	東壁 南寄	? 50	○ ×	×	×	本文参照	
19	長方形 N-26°-E	3.7×3.4 5	12.58	東壁 南寄	? 50	×	○ (^上 _下)	○ ○ 床面及び甕は検出された		
20	方形 N-3°-W	3.4×3.3 33	11.22	東壁 南寄	袖石 70 (^上 _下)	○ ?	○ (^上 _下)	○ ○ 本文参照		
21	長方形 N-12°-E	3.5×3.0 16	10.5	東壁 南寄	袖石粘土 50 (^上 _下)	○ ?	○ (^上 _下)	○ ○ 本文参照		
22	長方形 N-6°-E	3.1×2.9 40	8.99	東壁 南寄	袖石 80	×	×	○ (^上 _下)	○ ○ 本文参照	
23	不明 N-11°-W	3.1×? 43	?	東壁 南寄	粘土 60	×	×	×	鉄製品、須恵壺、土師甕が出土 住居北側をW-12が走る	23→W-12
24	不方形 N-14°-E	?×3.5 44	?	?	?	○ ?	?	?	東壁、南壁、西壁付近から焼土検出 須恵壺出土	
25	長明 N-19°-W	?	45	?	?	?	?	?	須恵高台付地出土 北壁一部が認められた	
26	長明 N-8°-E	?	47	?	?	?	?	?	土師壺が多量に出土 南壁不明瞭	
27	不方形 N-40°-W	6.5×? 31	?	?	?	?	?	?	火災住居、東壁に多量の炭化物検出 土師甕出土	27→W-14 27→28
28	長方形 N-12°-W	?×3.8 25	?	?	?	?	?	?	土師甕が出土	27→28
29	不明 N-27°-W	4.7×? 10	?	—	—	?	○ (^上 _下)	?	弥生土器(樽系)出土、火災住居 の可能性あり	
30	長方形 N-26°-W	5.3×4.6 11	24.38	—	—	×	○ (^上 _下)	×	弥生土器(樽系)出土、擾乱のためか開口 込み浅い。埋め土から多量のC軽石検出。	
31	不明 N-18°-W	?	5	—	—	?	?	?	弥生土器(樽系)出土、南側を W-18に切られ不明瞭	23→W-18
32	長方形 N-33°-E	5.0×4.5 35	22.5	—	—	×	×	×	本文参照	

●住居の壁走向は南北線を基準にした。●壁高は造構確認面からの最深箇所を計測した。●Wは溝状造構を示す。

(4) その他の遺構、遺物

① 土壙

挿図 31



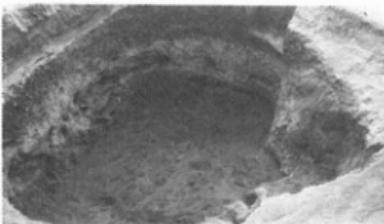
C区南側に検出された。入口部と思われる部分は北側にあり、地山を掘って作った土壙である。床面の形状は、ほぼ隅丸長方形を呈し、規模は5m×2mである。側壁はほぼ垂直であり、東側及び南側には、床面から約50~60cmの高さでテラス状の部分があり、床面との区別が考えられる。深さは、遺構確認から床面まで約2m、テラス状部分までが1.4~1.5m、入口部と思われる部分までが1.4mである。また床面近くから、土器の口縁の一部が出土した。

② ピット

ピットは総数69個検出された。A区のピット1では、砥石、回転糸切り跡が見られる土師塊が出土した。また、B、D、E区のピットでは埋め土の上層から繩文の文様がある土器片が出土した。D区のピット33からは、底部近くで瓦塔と思われる破片が出土した。この破片は屋根の部分であると思われ、丸瓦で途中に三ヶ所切れ目が入って、軒の部分と思われるところに丹塗りの跡がみられる。ピットの形状として特徴的なものはD区で検出されたピット群であり、平面の形状がほぼ円形で、直径約1.3mであり、深さも遺構確認面から40cm前後と共通性を持っているものが数多く検出されたが、調査範囲も限られ、ピットの相互関係や時期については不明である。

③ 溝状遺構

溝は20条検出された。特にC区の溝からは、以下に述べるように、多くの遺物が出土した。C区溝1は、C区中央から2号住居を切り、東へ折れ広がりをみせる。この広がりの部分からハケ目文



図版21 土壙遺構全景

のある土器片や内耳を持つ土器が出土した。C区溝2は、C区東側を南北に走り、ここからは和泉から鬼高期と思われる高環の脚部が出土した。C区溝3は、C区北東隅を斜めに横切り、ハケ目文のある甕の口縁部が出土した。溝7はC区を南北に走り、3号住居を切る。ここでは縄文の破片が出土した。溝8はC区北側を東西に走り、南北に走る溝2、溝7と交わる。溝9はC区北東隅を走り、溝3と交わる。この周辺からは縄文の文様がある土器片が出土した。溝11はC区南東部を走り、ここから瓦塔と思われる破片が出土した。この破片は屋根の部分のみで本体は明らかでないが、屋根瓦の表現は丸瓦のみで途中3か所の切れ目があり、隅棟は角形、垂木は平角である。

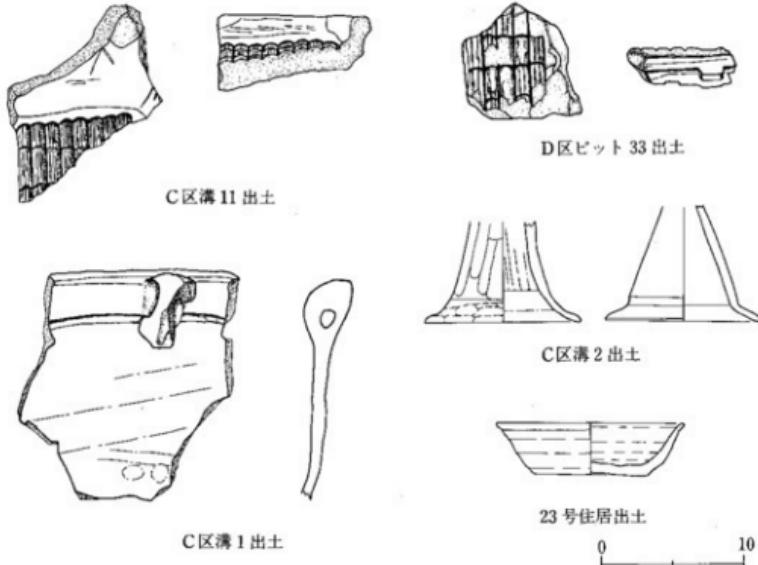
A区溝18は、31号住居を切り、東西に走る。ここからは、土師器と思われる破片が出土した。

以上の遺物はすべて、溝を埋めていた土の上～中層から出土したもので、溝の年代を確実にとらえるまでには至らなかった。

④ 井戸跡

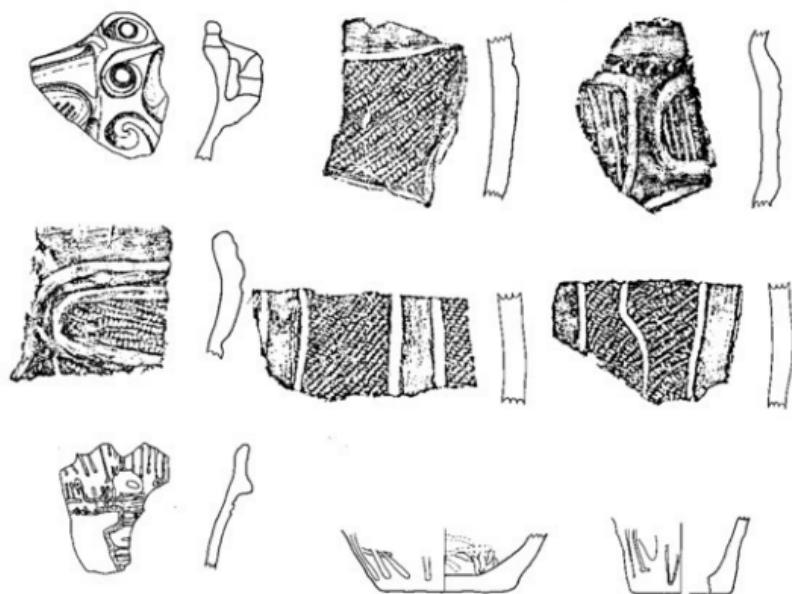
D区北側に2か所確認された。ともに井戸枠等は確認されず、素掘りである。平面の形状はともにはば円形で、井戸1は2.1m×1.9m、井戸2は1.6m～1.5m。断面の形状は、井戸1では円筒状であり、井戸2は上部がロート状に広がり、下部は円筒状である。深さは、井戸1が遺構確認面から2m前後、井戸2も1.5m前後の所で危険防止のため調査を断念しているので、不明であるが、さらに深く掘れる。遺物は、井戸1では人頭大の石、井戸2では、石皿かと思われる中央が凹んだ石と土師器の破片が埋め土から出土したが、時期を決定づけるまでには至らなかった。

⑤ その他の出土遺物

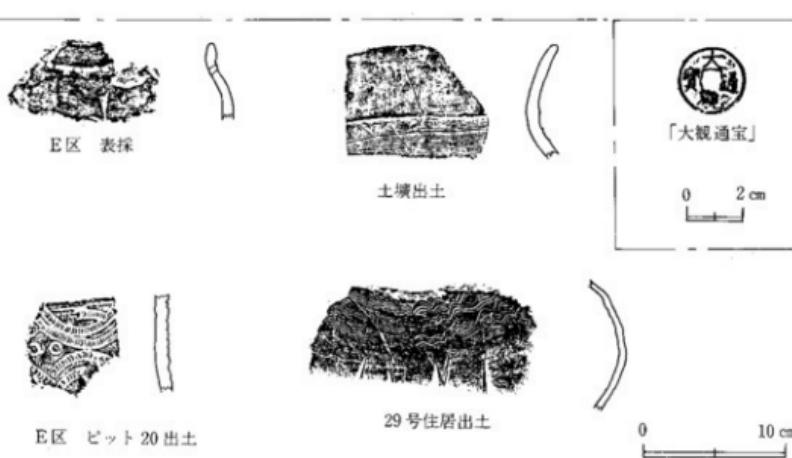


その他の出土遺物実測図

挿図32



B区 表採



図版2-2



土器 出土



C区 溝2 出土



D区 ピット33 出土



E区 表採



A区 遠景



B区からC・D区及び多田山を望む



B区 遠景



C区 遠景



D区 遠景



E区 遠景



B区 繩文土器片 散布状態

III まとめ

昭和57年度の調査では、以下のことが確かめられた。

- 縄文時代の遺物を伴う遺構は検出されなかつたが、遺物の地表採取調査をはじめ、B区全域及びC、D区にわたり、縄文中期と思われる土器片の散布がみられ、特にB区南西端では大量に土器片が散布しており、周辺に遺構の存在を予想させる。
- A区では道水路部分のみの調査であったが、弥生式土器を伴う住居4軒を検出した。検出した住居すべてが櫛描文のある櫛系土器を伴っていること、埋め土に多量の浅間C軽石を含んでいること、^(註1)A区に隣接する昭和55年度調査地区からも櫛系土器や赤井戸系土器を伴う円形周溝墓が検出されていること等から、周辺に弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落が推定される。B区でも弥生式土器を伴う住居2軒を検出した。この2つの住居は、規模、壁走向が非常に類似しており、さらに住居を埋めていた土に多量の浅間C軽石が含まれていることから、同時期の住居と考えられる。また、C区でも弥生式土器を伴う住居1軒を検出した。櫛系土器、赤井戸系土器、石田川系土器が共伴して出土していることから弥生時代後期から古墳時代前期の住居と考えられる。
- 古墳時代の遺構としては、石田川期と思われる古墳前期の住居2軒を検出した。また、和泉期から鬼高期にかけての土器と思われる高環の脚部を伴った溝が検出されたが、和泉期から鬼高期（古墳中期から後期）にかけての住居は検出できなかった。
- 集落の主体をなすものは、奈良時代後半から平安時代の住居で22軒検出した。前述のように古墳時代中期から後期の住居、さらに奈良時代前半と思われる住居が検出されなかつたことや、昨年の^(註2)調査では第1工区D区（北山地区）での集落の主体が鬼高II～III期であり、古墳前期から中期にかけての住居が検出されなかつたこと、同じく第2工区（梅ノ木地区）でも、古墳時代前期から中期の住居が主体で、国分期の住居もみられるが、古墳後期（鬼高II）から奈良時代の住居が検出されなかつたことは、時代に伴う集落の区域を想起させる。
- 奈良・平安時代の住居に特徴的なことは、不明なものを除き、竈の作られた位置が、すべて東壁であり、そのほとんどが東壁南寄りで、煙道部が住居外へ延びており、貯蔵穴は竈右側に掘られていることである。また、B区では、張り出しを持つ住居3軒を検出した。いずれも住居北壁に張り出しを持つ共通性がある。張り出し住居は、張り出す位置や時期によって類別できるが、周辺の遺跡から、本遺跡の張り出し住居の類例を探してみると、荒砥五反田遺跡^(註3)、伊勢崎・東流通團地遺跡^(註4)の例があげられる。特に荒砥五反田遺跡で報告された住居は、国分期で、しかも北壁西寄りに張り出しを持っており、本遺跡の張り出し住居との類似性が認められる。
- 平安時代の住居の下限は、羽釜や土釜が共伴して出土している住居があることから、11世紀前後と思われる。
- 遺構に伴わなかつたが、C・D区から瓦塔と思われる破片が出土した。この瓦塔の年代的位置づけは、破片のみでその特徴がつかめず、むずかしいが、胎土に石英が含まれ、夾雜物が少なく緻密であることから、安中市の桃山遺跡の窯のものとの類似性がみられる。瓦塔は、上野国分寺跡^(註5)、上植木廃寺をはじめ寺院関係の遺跡から出土する例が多く、周辺に寺城や墓域が推定される。また、C区南部から古銭（大觀通宝—1107年以降）が出土した。

- 注1. 30号住居及び32号住居を埋めていた土には多量の浅間C軽石が含まれていたが、29号住居及び31号住居は擾乱が激しく、浅間C軽石は、わずかしか認められなかった。
- 注2. 「西大室遺跡群II」(昭和55年度、前橋市教育委員会) 第3次調査地区…本遺跡地(A区)西側の上締引地区
- 注3. 「富田遺跡群・西大室遺跡群」(昭和56年度、前橋市教育委員会)
- 注4. 張り出す位置から類別すると、西壁に張り出しを持つ住居は、鶴谷遺跡群II(1981、前橋市教育委員会)、桧峯遺跡(昭和56年度、前橋市教育委員会、佐田建設株式会社)等で、また南壁に張り出しを持つ住居は、西大室遺跡群(前掲の注3)、伊勢崎・東流通団地遺跡(1982、群馬県企業局)等で、東壁に張り出しを持つ住居は、清里南部遺跡群III(昭和55年度前橋市教育委員会)等で、報告されている。
時期的にみると、古墳時代中期から後期の住居例は、鶴谷遺跡群II、西大室遺跡群、伊勢崎・東流通団地遺跡等で報告され、国分期及び国分以降の平安期の住居例は、桧峯遺跡、清里南部遺跡群III、荒砥五反田遺跡(昭和52年度 群馬県教育委員会)等で報告されている。
- 注5. 前掲の注4
- 注6. 前掲の注4のように南壁に張り出しを持つ住居だけでなく、北壁に張り出しを持つ住居例も報告されている。なお、この住居の時期は、古墳時代後期と思われる。
- 注7. 瓦塔については、群馬県埋蔵文化財事業団、大江正行氏の御教示を得た。
- 注8. 「入谷遺跡」(1981 新田町教育委員会)からも、瓦塔が出土しているが、入谷遺跡の性格は、寺院よりも官衙の可能性が高いと報告されている。

整理作業員

柴崎まさ子、新保一美、加部二生、武井美枝子、岩木操、高島あや子、富樫則子、兵藤明美
亀井弘美、星野久美子、城田和泉、栗岡エミ子、村上孝子、高島康、立川正子

発掘作業員

久保千代子、小保方静子、入沢やい、内藤美代子、牧野せつよ、小林初子、星野辰男
天沼福太郎、小屋政雄、高橋やすの、下山良雄、細谷貞子、細谷ふさ子、栗原計子
久保もり子、石井春枝、内藤きん子、栗原登女吉、山田大作、内藤よし子、千吉良美代子
高橋政子、柴崎香代子、久保ヒデ、松木保、千吉良仁至、井上真由美、梅沢晋
黒岩晃、滝沢靖

(順不同、敬称略) 他、多数の方々に御協力いただきました

西 大 室 遺 踪 群

昭和 58 年 3 月 31 日 印刷

昭和 58 年 3 月 31 日 発行

発行 前橋市教育委員会
前橋市大手町二丁目 12-1
印刷 有隣会社 原田印刷所
前橋市大手町三丁目 6-10